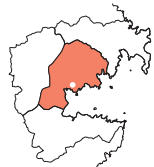


一万人の避難者に水を食料を ～災害対策本部～



▲毎日定時に開かれた町長の記者会見。メディアの力が多くの人々を南三陸町に呼び込んだ。

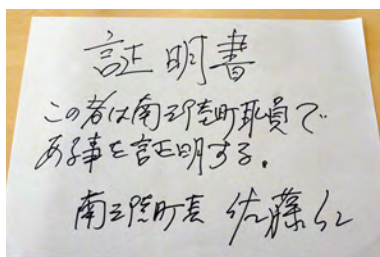
災害対策本部が動き出したのは、被災翌日だった。

本部の指揮に当たるべき町長は、津波に襲われた防災対策庁舎の屋上で、かろうじて生き残った9人の職員たちと、ずぶ濡れのまま氷点下の夜を凌いだ。翌朝10人は怪我を負い衰弱した身体に鞭打って、自力で庁舎から脱出。よろめきながら高台の小学校にたどり着いた。一息つく間もなく、町長は高台のベイサイドアリーナに移動し、小さな事務室で災害対策本部を立ち上げた。肉体的にも精神的にも消耗しきっていた町長を突き動かしたのは、町民の命を守らなければという強い思いだけだった。

電話もネットも通じず、ライフラインは途絶し、必要な人や物や情報が何ひとつないという状況で災害対策本部は始動した。最初の会議の参加者は、2人の広域消防職員と町長のたった3人。町長の最初の指示は「情報を集めてくれ」、「住民におにぎりを頼む」だった。夜は、手回し充電のLEDライトを頼りにメモをとった。毛布もなく、寒さに凍えながら床にごろ寝して仮眠する職員の中には、津波で家族や家を失った者もいた。

翌日から、多くの救援者たちが途切れることなく駆けつけた。情報収集もままならない混乱の中、集まった報道陣に、町長は「水を、食料を」と呼びかけた。そして、コピー用紙に手書きした証明書（左下写真）を動ける職員に持たせ、内陸の町での食料や日用品の後払いでの調達を命じた。

間もなく災害対策本部には、宮城県、地元消防署、警察に加え、緊急消防援助隊、陸上自衛隊西部方面隊、同北部方面隊、国土交通省東北地方整備局、宮城県の職員たちが入り、本格的に災害対応が始まる。



▲町長が役場職員に持たせた手書きの証明書。（再現）

内陸部の店の方々が優先的に食料や医薬品などを融通してくれた。